大学生観光まちづくりコンテスト 2014 西日本ステージへの参加

倉　持　裕　彌

はじめに

2014 年夏、鳥取環境大学の学生有志が「大学生観光まちづくりコンテスト 2014 西日本ステージ」へ参加し、ポスターセッション最優秀賞を獲得した。筆者はその担当教員として、彼らとともにコンテストに参加した。ここでは、コンテストの参加を通して得られた教育的な効果や課題を整理しておきたい。また、コンテストがもたらす地域振興の効果についても若干考察する。

ポスターセッションで最優秀賞を受賞

1．コンテスト概要

大学生観光まちづくりコンテストとは、大学生が任意のチームを編成し、主催者側から与えられたテーマに従って観光まちづくりプランを作成、書類審査とプレゼンテーション審査によって、優秀プランを決定していくコンテストである。主催者側には、JTB や三菱総研などの民間企業のほか、後援として観光庁、文部科学省など関係省庁、我々が参加した西日本ステージの場合、大阪商工会議所などが名を連ねる。ちなみに地元大阪府はコンテストに協力という形で参加している。

さて、西日本ステージのテーマは大阪を訪れる外国人観光客に向けた観光まちづくりプラン、というものであった。プランを作成するにあたっては大阪府内の現地調査が義務付けられている。調査を経て、プランを作成した各大学のチームは、まず書類審査にかけられる。審査の結果、上位 1/3 のチームがプレゼンテーション審査に進むことができる。ここに選ばれなかったチームは、ポスターセッション出場（ポスターの簡易なプレゼンテーションを実施、審査あり）、いずれも該当せず、というように分けられる。

2．鳥取環境大学チームの奮闘とコンテスト

このコンテストは 2011 年から始まっており、参加大学の中には過去の経験を有しているチームも

ある。現地調査からプレゼンテーションまでの流れを理解していることは有利な点である。例えば参加経験の豊富な明治大学は一つのゼミから2~3チームを編成し、複数地域のステージに参加していた。鳥取環境大学のチームは初出場のため、右も左もわからない状態であった。

不利な状況とはいえ、出場するからにはせめてプレゼンテーションまで行ってみたい、という気持ちがチームにあった。そこで、プランの方向性を２つに分け、検討することとした。一つは、現実性は多少劣るものの奇抜さやアイデアによってインパクトを残そうとする方向性、もう一つは鳥取県での知見・経験を活かして、大阪の数少ない中山間地域を題材とする方向性である。最終的には、防災をテーマとしながら、そこに大阪らしい駄洒落を組み合わせた「防災×観光まちづくり」をコンセプトとするプランとなった。これは地味ながらもインパクトを残そうとする方向性であった。結果的にはプレゼンテーションには進めなかったものの、ポスターセッションの受賞につながったので、初出場としては、健闘したものと思われる。

３．教育的な効果と課題

さて、このようなコンテストは、多くの教育的効果を含むと考えられる。そのうち３点ほど指摘しておきたい。まず、講義で得られる観光に関する知識を実践的に活用する機会となっている点である。次に、見知らぬ人にプランを理解してもらうことを前提に、資料を作成する経験を積めることである。最低でもポスターセッションまで進むことで、審査員や他大学から、自らの企画への評価やアドバイスを受けることもできる。最後に、コンテストに出場した他大学と交流を行えることである。コンテスト当日も懇親会が用意されているが、我々はさらに進んで、後日、本選出場した数チームと連絡をとり、彼らを鳥取に招聘し、主に観光に関心のある学生向けに合同のプラン報告会を開催した。お互いのチームが濃密な時間を共有することができ、刺激を受けたようである。

他大学との合同報告会を開催

他方、課題もある。課題の一つは、大学の立地環境である。プランを作成する際にテーマとなっている地域に近いほど、資料収集やその他の面で有利である。この点は大阪府や観光関連団体などの協力を得ることで補完可能とはいえ、こうした協力を得る作業は、学生にとっては敷居の高いものである。遠方の大学向けに、例えば対応窓口を作るなどの配慮がほしいと感じた。

もう一つは、過去のプランが公開されていないことである。経験の浅いチームにとって、あらゆる情報が貴重である。なかでも過去のプランは、そのコンテストのレベルや審査基準を知るうえで重要な要素となる。逆にそのような情報に頼らずに作成したものを審査したい、という主催者側の意図も

あると思われるが、出場経験のあるチームは既に所有している情報であることを考えると、公開して門戸を広く構えるべきであろうと考える。

４．地域振興の効果

観光まちづくりコンテストの各プランは、地域振興につながる可能性を持つ。プランがそのまま実行されれば直接的に効果を持つと考えられるが、仮に実行されないとしても、各大学のチームが練り上げたプランには、観光およびまちづくりの分野に応用可能性の高いアイデアが多く含まれているように思われる。実際、我々のチームの「防災×観光まちづくり」というコンセプトも大阪以外の地域においても十分検討の余地がある。大学生のアイデアを地域振興と結びつけるためには、なるべく多くのアイデアが、利用可能な形になっている必要がある。このコンテストは、運営方法や広報、審査方法などコンテストとしての完成度はすでに高いと思われるが、例えば集まった大学による協議の機会を設け、それぞれのアイデアを一つにまとめるような試みがなされることを期待したい。